

成長の肥やし

坂 真由美

聖バルナバ病院助産婦(大阪市)

阪神大震災

1995年1月17日早朝、「ドーン」という低くて大きな音の後、激しい揺れのため寮のベッドから振り落とされそうになって私は目覚めました。様々なものが床に落ち、暗闇の中でも部屋が乱れている様子が窺えます。もう一度寝ようと布団にくるまりましたが、廊下からすすり泣く声や悲鳴が聞こえ「これはただごとではない!」と外へ出ました。同じ寮にいる看護婦たちは皆動揺しており、混乱状態にありました。

当時勤務していた神戸市立中央市民病院小児科病棟へ、少し早めに出勤しました。いつも通っている道なのに、外へ出た途端激しく転んでしまいます。道に大きな亀裂や、ボコボコの段差があったからです。病院に着いても、地下は水びたしで更衣室へ行けず、さすがの私も、事態の重大さを認識し始めました。エレベーターは作動せず、7階にある病棟まで真っ暗な階段を手探りで昇っていくうちに、圧迫感と恐怖感で気分が悪くなりました。

病棟は想像以上に大変なことであり、床には、割れたアンプルや倒れた柵の中身が散乱。人工呼吸器を装着している3人の児に、夜勤の看護婦は手をとられ(アンビューバッグをもみ続けている)、怖がって泣いている子や興奮してはしゃいでいる子、点滴が抜けて血が止まらない子など、皆パニックに陥っていました。その日から、私は何日も働き続けました。就職3年目の看護婦時代の出来事です。

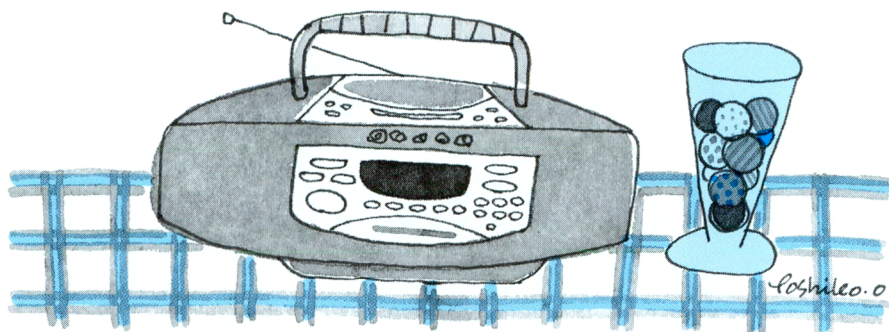
震災前の私は、子供の命を預かる緊張感や夜勤、子供の死、いろいろなことに疲れ、バーン・アウトしかけの状態でした。しかし皮肉にも、この震災という苦境の中で働くうちに、いつしか人の強さや優しさに触れ、徐々に気持ちが変わってきました。その後多くの気づきや学びも得、看護婦として充実した日々を送るようになりました。この体験そのもの、そしてその中で出会った子供たち、ご家族は、私の一生の財産です。

様々なお母さんたちと接する中で、子供だけに目を向けるのではなく、「母子」というものに関心をもった私は、助産婦になろうと考えはじめました。就職6年目のことでした。

父の死

当時、病気で入退院を繰り返していた私の父のことが気になっていたので、自宅に少しでも近い助産婦学校に通って、そのまま就職しました。

助産婦になって就職1年目の6月、父は壊疽のため入院しました。以前も同じような入院を経験していたので、私を含め、家族は深い考えもなく手術を受け入れました。その2か月後、何がどうなったのかわからないまま、父の死は訪れました。父の状態が悪化する中、病状が気になるのに聞けず、「これは治るの?」「父があまりに可哀想!」「一体何が起きているの?」「そんな扱いひどい!」等思いをめぐらし、私は初めて“弱者”になりました。震災にも臆せず立ち向かえた私ですが、それは当時の私には守るべきものも、失うものもなかったからだと思いました。



父は亡くなる3年程前にも、軽い脳梗塞で入院しました。父の危篤を告げる電話を受けたことがあり、泣きじゃくりながら父の病院へ向かう中、その前日、父がやけにしんどそうだと思いつつも、医師や看護婦に何も聞かずに帰ったことを後悔しました。結局父は、その時は最終的に軽快したのですが、「聞けなかったこと」は私の苦い体験として心に残りました。また、同業の医療者から私たち患者家族に発せられるきつい言葉や態度にも随分傷つき、逆に自分の仕事を振り返ったりもしました。このような体験から、私は心にしこりは残さないようにしよう、その時できることはしておこう、そして何より医療者として、患者や家族を傷つけるようなことはあってはならない、という信念を抱くようになりました。

父が亡くなる日の朝、ふだん付添いの交替が多くゆっくり話す機会のなかった母と、久しぶりに話をしました。前日分娩介助をしていた私は、「人は生まれて死んでいく。これは誰にも平等におこる当たり前のことだと、今は素直に思える。それはすごく自然なことだと、生まれてくる赤ちゃんを見て思った」と母に言い、母も「お父さんが脳梗塞で倒れた時、そのまま死んでいたら、お母さんはお父さんの死を受け入れられなかったと思う。病气してからのお父さんはしんどかったけど、あれから3年も頑張ってくれた。ちょっとずつ受け入れる時間をくれたんだと思う。今もこんなしんどそうやのに、私らのためにがんばってくれている気がする」と、2人で心の内を伝え合い

ました。そんな話をしながらも、まだ“父が死ぬ”という実感はなかったのですが、その日の夕方、父は息をひきとりました。私たちが死を受け入れる準備ができたと思ったのでしょうか。「人は意識がなくても聞いている」というのは本当だと思いました。

2つの転機を受けとめて

人には転機というものがあります。その時はただ時を過ごしているだけと思っても、大きく次に展開していくのです。看護の道に入って10年が経ちますが、この2つの出来事は、私にとっての転機となりました。人生の芯の部分に大きく影響し、私を成長させてくれた出来事でした。

地震の後の劣悪な環境で働く中で、「医療や看護に、絶対こうしなくてはならないものなんてない」「基本はやっぱり<人>なんだ」と思い、人をケアする面白さや深みを改めて感じましたし、人とのつながりや家族について考えさせられ、人間と向き合い関わっていくこの仕事を、ずっと続けていきたいと思いました。父の闘病生活や死も、とても悲しい体験でしたが、弱い立場だったからこそ見えてきたものも多くあり、人の痛みを「心から感じる」ことができるようになった気がします。

今まで出会った人たちからもらったものを大切に、新たな出会いや学びに期待し、今後もいろいろなことを吸収していきたいです。人として成長する肥やしが、日常の中にあることを忘れずに。

(さか・まゆみ)